

第9章

『従妹フィリス』

(*Cousin Phillis*, 1863-64)



Jacob Thompson (1806-79),

The Course of True Love Never Did Run Smooth (1854)

主要な人物

ポール・マニング (Paul Manning)

この小説の語り手。父の共同事業者エリソン氏 (Ellison) の娘マーガレット (Margaret) を妻に迎え、中年に達した彼が、鉄道技師の助手をしていた 17 歳から 21 歳くらいまでの年月について語る。その中心は従妹にあたるフィリス・ホウルマンの初恋の顛末についてである。

フィリス・ホウルマン (Phillis Holman)

ポールの 2 歳年下の従妹で、この小説のヒロイン。父親似の大柄で知的好奇心旺盛な娘。田園育ちの純朴さは、ワーズワス (William Wordsworth, 1771-1855) がいわゆるルーシー詩 (Lucy Poems) の中で「この乙女、誉むる者もなく、愛する者も少なかりき」 (“A maid whom there were none to praise, / And very few to love,” [1799]) と詠んだ少女のそれにたとえられる。

エビニーザ・ホウルマン (Ebenezer Holman)

フィリスの父親で、独立教会派 (Independent) の牧師。イングランド北部のヒースブリッジ (Heathbridge) 村にあるホープ農場 (Hope Farm) で週に 5 日を農業に費やししながら、ウェルギリウスの『農事詩』 (Virgil, *The Georgics*) さながらの生活を営む。古典文学を愛好する一方で、新しい時代を象徴する科学技術に関心を持つ。

エドワード・ホウルズワス (Edward Holdsworth)

ポールの上司にあたる鉄道技師で、物語最初での年齢はだいたい 25 歳。イタリアで鉄道工事の仕事に従事するなど放浪的な生活を営み、外国の風俗や言語を身につけている。フィリスを魅了し、また彼自身もフィリスの純朴さに愛情を抱く。しかし、高名なグレイトヘッド技師 (Greathed) の依頼によって赴いたカナダで、フランス系移民のリュシーユ・ヴァンタドル (Lucille Ventadour) と結ばれる。

フィリス・グリーン・ホウルマン (Phillis Green Holman)

「従妹フィリス」の母親で、ポールの母親の又従妹。心から夫を慕い、

亡き長男ジョニー (Johnnie) の分まで娘を溺愛する。しかし、教養に欠けるために学問的な興味を夫と共有することができず、知的な娘フィリスに嫉妬さえ感じているのではないかとポールに思わせる。なお、ポールの母親の結婚前の名前はマーガレット・マニペニー (Margaret Money Penny) である。

ドーソン姉妹 (Dinah and Hannah Dawson)

ポールの家主である老姉妹。イングランド北部のエルサム (Eltham) という郡都 (county town) でパン屋を営んでいる。父親は独立教会派の牧師である。ポールが同じく独立教会派のピーターズ牧師 (Mr. Peters) にお茶に招待されるのをこの上ない名誉と考えるが、その一方で、ハウルズワスのことを、外国へ行っただけでも罪深いと嫌う。

ジョン・マニング (John Manning)

ポールの父親でバーミンガム在住の独立教会派の信者。機械工だが、発明の才があり、さまざまな発明品を世に送り出している。「かわいい子には旅をさせよ」(“Spare the rod, and spoil the child”) が口癖だが、自覚している以上に一人息子のポールを可愛がっている。独り暮らしをする息子の道徳心に歯止めをかけんと保守的なドーソン姉妹を家主に選ぶ。

ロビンソン牧師 (Brother Robinson)

エビニーザ・ハウルマンの同僚の牧師。ハウルマンより年長だが、社会的地位や教育はハウルマンに劣る。

ティモシー・クーパー (Timothy Cooper)

ホープ農場の間抜けな作男。娘の傷心を知って動揺したハウルマン牧師に、いったんは解雇されるが、病に苦しむフィリスに対する心遣いを認められて再び雇い入れられる。

ベティ (Betty)

ハウルマン家の女中。人間観察の目が鋭く、失恋によるフィリスの変化をいち早く見抜く。物語の最後では、親からの自立を促す言葉をフィリスに投げかける。

作品の梗概

17歳のポール・マニングは就職を機に親から独立し、エルサムのパン屋の屋根裏部屋で下宿生活を始める。上司のエドワード・ハウルズワスの外国風の身なりや有能さに憧れを抱き、また、仕事で出かけるホーンビ(Hornby)近郊の田園を散策するのを楽しむ。週末はピーターズ牧師にお茶に呼ばれることもあるが、退屈な牧師の話にはげんがりしている。

約1年が経過する。もうすぐ19歳という9月に、ポールは両親への手紙の中で、ホーンビ近郊のヒースブリッジ村に仕事で出かけたことを何気なく言及する。これをきっかけに母親の又従妹が村の牧師夫人であることを知り、ポールは両親に促されるままに牧師一家の住むホープ農場を訪ねる。そこで「従妹フィリス」に迎えられる。ポールはその美貌に一瞬目を奪われながら、彼女が年齢不相応の子供用のエプロンを着けているのを奇妙に思う。父親似の大柄なフィリスは、知的好奇心の強さも父から受け継いでおり、古典にも科学技術にも強い関心を持っている。

ポールは牧師やフィリスと些細なことで衝突したりもするが、次第に一家と親しくなり、月に1度はホープ農場で週末を過ごすようになる。なお、その年の秋に起きたことでポールの記憶に残っていることとえば、ある日フィリスが子供用のエプロンを着けなくなったことくらいである。クリスマスに、ポールは父のジョンを伴ってホープ農場を訪れる。ジョンはカブ切り機の構造について牧師と意見を交わしながら、傍らで熱心に話に耳を傾けるフィリスの美貌と聡明さに感銘を受け、フィリスを妻に迎えてはどうかと提案してポールを驚かせる。

翌年の初めからハウルズワスは病で寝こみ、6月になってある程度回復すると、牧師夫妻の招きによりホープ農場に滞在する。牧師一家がハウルズワスに相容れなさを見出すのではないかというポールの心配をよそに、牧師はハウルズワスには思慮が足りないと思いながらも、その豊富な知識と人柄に好感を持つ。フィリスはハウルズワスの世慣れた態度に当惑しながらも、次第に彼に惹かれていき、イタリア語学習について

助言を得るようになる。一方のハウズワスは、一家の純朴さや教養の高さに彼なりの敬意を払う。

夏の休暇にポールはバーミンガムの実家で1週間を過ごし、父の共同事業者のエリソン氏と娘のマーガレットに初めて会う。休暇が終わると、工事の進展にしたがってハウズワスと共にホーンビへと居を移す。ホープ農場との距離が縮まり、容易に行き来できるようになる。

ある蒸し暑い夕べにポールとハウズワスはホープ農場を訪れ、牧師やフィリス、そして作男たちに測量術を教える。すると突然雷鳴が轟く。土手で雨宿りしているときに、フィリスは測量機器の一部が雨にさらされているのに気づき、雨に濡れるのも厭わずそれを取りに行く。そんな彼女にハウズワスは礼を言うどころか、雨に濡れて心配させるなど「キリスト教徒らしからぬ」行為だと冗談を言い、彼女を激しく狼狽させる。そうかと思えば今度は、真面目な顔で何かを呟き、彼女を赤面させ、さらには押し黙らせてしまう。

収穫期のある日、ハウズワスは豊作の女神ケレス (Ceres) のように髪を垂らしたフィリスを写生する。しかし、フィリスが彼の方を見ることもできずに部屋を飛び出してしまったため、写生は未完成のままである。収穫も最後の日、果樹園へと続く道でハウズワスはある古風な花に目を留める。フィリスはその花を束にし、別れ際にハウズワスに手渡す。彼は愛情のこもった眼差しを彼女に向けながら受け取る。

ホーンビの共同の下宿に戻ると、ハウズワスに路線工事のためにカナダに行くよう依頼する手紙が届いていた。彼は即刻出発を決意し、フィリスへの想いをポールに打ち明け、2年後には彼女を迎えに戻ると言い残すと、未完成の写生と花束を手を旅立つ。ポールは1週間後にホープ農場を訪れ、急な旅立ちを一家に知らせる。フィリスは必死に動揺を隠し普段どおりに振舞おうとする。

クリスマスの日、礼拝堂でポールは、フィリスが重病であるとの噂を聞くが、顔色が悪いながらも勤勉に働いている彼女を見て、風邪の後遺症で体調が悪いのだろうと考える。しかし、さらによく見てみると、フィリスはハウズワスの書き込みがある本を手をすすり泣いている。そ

して、慰めようとするポールを振り切って外に飛び出し、果樹園にある薪の山の中に隠れてしまう。それは子供の頃からのフィリスの避難所で、家が狭苦しく感じられるとそこにやって来るのである。ポールは彼女を元気づけようとして、ハウルズワスがフィリスへの想いを残しながら旅立ったことを打ち明ける。彼女は再び涙を流すが、その顔は歓喜の表情に溢れていた。

ポールが次にフィリスに会ったのは復活祭のときである。ポールは彼女が元気で生き生きとしているのを喜ぶ一方で、ハウルズワスの気持ちを告げるべきではなかったのではないかと不安でもある。その後、ハウルズワスがリュシーユ・ヴァンタドルという娘と知り合ったことを手紙で知り、ポールはますます不安になる。

夏に路線が完成すると、ポールは鉄道の仕事を辞めて父の事業を手伝うことになる。帰郷前の数週間を過ごしに立ち寄ったホープ農場で、ポールはハウルズワスからの手紙を受け取り、彼とリュシーユとの結婚を知る。フィリスに彼の気持ちを打ち明けるべきではなかったという自責の念に苛まれながら、ポールはフィリスに手紙を見せる。彼女は必死に感情を抑えようとするが、それ以後、ポールにはフィリスの変調が目につくようになる。

ある日、ポールは、彼と同じくフィリスの変調に気づいていたベティーに食ってかかれる。フィリスの失恋を秘密にしておきたいポールは、牧師夫妻がいつもと変わらぬ様子であることを挙げながら、何を言われても知らぬ存ぜぬを押し通そうとするが、娘を赤ん坊同然に見ている牧師夫妻がフィリスの変化に気づくはずはないというベティーの指摘を聞いているうちに、ハウルズワスの結婚が原因で、フィリスが傷心していることを明かしてしまう。

7月も半ばを過ぎた頃、ポールは牧師が家族の前でカナダからの結婚の知らせを開封する場に居合わせる。フィリスの動揺したそぶりから、ハウルマン牧師はフィリスとハウルズワスの間で感情的なやり取りがあったことを察し、彼自身が動揺してしまったことからティモシー・クーパーを些細な理由で解雇してしまう。その後、ポールから一部始終を聞

き出すと、移り気なハウルズワスの気持ちをフィリスに伝えたポールの無分別さを叱責する。見かねたフィリスはポールをかばい、ハウルズワスへの想いを父に打ち明ける。そして、親の愛情だけでは足りないのかと父に糾弾されると、フィリスは脳膜炎の発作を起こし、父の足元に倒れてしまう。

フィリスの様態は重く、ロビンソン牧師らがハウルマン牧師を訪ね、諦めの手本となるよう説くほどであった。それでも、家族の看護と、ティモシーやベティーら使用人たちの心遣いの甲斐あって、回復するが、欲しいとかつて言っていた青いリボンを、ハウルマン牧師に差し出されても、気力が戻ることはなく、フィリスは物憂げな表情でリボンを脇にやるだけである。しかし、自力で元気を取り戻さなければならないというベティーの言葉に促されて、フィリスはポールに、2ヶ月ほどバーミンガムの家に置いてもらえないだろうかと願い出る。そして、「私たちは穏やかな昔に戻るわ。私にはわかるの。私にはできる、ええ、そうしてみせるわ！」と宣言をする。

新旧の価値の出会いとヒロインの自立

1 序

『コーンヒル・マガジン』(*The Cornhill Magazine*) に 1863 年から翌年にかけて 4 部に分けて連載された『従妹フィリス』は、『クランフォード』と並び称されるギaskellの田園小説で、鉄道が新しい時代の息吹をもたらした頃のイングランド北部の田園を舞台とする。この作品が執筆される直前の 1862 年 5 月 2 日に、幼少期を過ごしたナッツフォードに鉄道が開通したことから、¹ ギaskellは鉄道の到来によって故郷の生活がいかに変化していくかに関心を持ち、その関心からこの小説を描いたのではないかと指摘されている。²

ギaskellは、エビニーザ・ハウルマン牧師によって象徴される田園の旧世紀的な価値が、³ 鉄道技師のエドワード・ハウルズワスによって象徴される新しい時代の価値と出会い動揺する様を、ヒロイン、フィリス・ハウルマンの失恋の顛末に描き込んでいる。⁴ 自然と一体化したかのように純朴なフィリスは、酷似した外見が示唆するように、父親の影響を強く受け (271)、父が創りあげた田園の重要な一部でさえあるかのように見えていた。しかし、ハウルズワスに魅了され、未だ経験したことのない心の揺らぎを経ることによって、それまで認識することのなかった父の意思や、親子の意識のずれを知るようになる。そして、葛藤の結果として、物語を締めくくる「私たちは穏やかな昔に戻るわ。私にはわかるの。私にはできる、ええ、そうしてみせるわ！」(“we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!” [354]) という言葉を発するのである。

この言葉については様々な解釈がなされており、例えば、イーソンは過去に回帰することの困難さを指摘しながら、フィリスの将来について懸念を表している (Easson, *Elizabeth Gaskell* 223)。⁵ 確かに、「穏やかな昔」は、ハウルズワスに出会う以前の迷いのない頃を明らかに指してい

る。フィリスの胸中には、何ものにも心を乱されることのなかった昔のように、父の田園で暮らすことを希求する気持ちが、幾分かはある。しかし、フィリスが完全に後ろ向きになったというわけではない。この宣言はまた、フィリスの強い意志を感じさせる言葉であって、過去への退行を意図する虚しい言葉ではなく、精神的な独り立ちを誓うフィリスの自立の宣言と解釈することができるのではないだろうか。

2 ホープ農場とフィリス

ギヤスケルは、特に前半部において、工業都市バーミンガム出身のポールの視点を通して、ホープ農場をその周囲に広がる世界とは異質の空間として描く。ポールは、初めて農場へ向かうときには、時間をさかのぼり旧約聖書の人物になったような感じ (267) を受けているし、次に訪れるときには、時間的な変化のないユートピアにいるような印象を抱き、「そのときの静かで単調な雰囲気のために、自分がまるで永遠に生きているかのような気分になった」(282) と回想する。これはホープ農場を外部から見た場合に誰もが抱きがちな、時代の変化から取り残されたユートピア的ないしはエデン的なイメージである。その背景として、農場主のハウルマン牧師が、ポールには退屈であろう聖書と、時代遅れに見えるであろうウェルギリウスの『農事詩』に生活の規範を求めていること、すなわち、新しいものの価値よりも不朽の価値を優先させていることが挙げられる。しかし、保守的な理念を持つ一方で、ハウルマン牧師は、牧師らしからぬ屈強な身体つきが示唆するように (271)、教義偏重主義の同僚ロビンソン牧師ら、ステレオタイプの牧師像からは程遠い (351)⁶ 「現実的な良識」 (“practical good sense” [Allot 31]) の持ち主であって、古典を愛好しつつ旧態依然とした生活を送りながらも、ドーソン姉妹のように偏狭さに陥ることはなく、「鉄道がこんなに近くまで来ているのだから、それについて知りたい気持ちにもなるよ」(278) という言葉の通り、鉄道にも関心を持ち、ハウルズワスやジョン・マニングといった機械畑の人間たちから積極的に学ぼうとする。一言で言えば、不朽

の価値に規範を求める保守性を持ちながらも、実用的な技術は学び、取り入れていくのが、ホープ農場を管理する上でのハウルマン牧師の姿勢である。

フィリスは、そんな父の影響を色濃く受けている。フィリスのホープ農場における役割は、夕焼けに染まる風景の広がる中で、ハウルマン牧師が『農事詩』の一節を口ずさむ場面で最初に表れる。⁷ 牧師は「ウェルギリウスはまさに不朽の形容句を用いていると言えるね、二千年近くも昔の、それもイタリアでだよ。それなのに、なんて適確に表現しているのだろう、イングランドの、---郡の、ヒースブリッジの教区で我々の前に広がっているこの風景を」(273) と感嘆の声を漏らす。ラテン語を理解できずに戸惑うポールを尻目に、フィリスは父親と視線を交わしながら、その理解の程を示す。彼女は古典一般に関心を持つが、ここで父に示した理解には鑑賞上の理解だけではなく、目の前に広がる農場を管理する上での技術的な理解も含んでいると考えられる。後に牧師が、『農事詩』の第一巻に、地均しと灌漑について書いてある、少し先には、最上の種を選ばなければならない、とか、排出口はきれいにしておくべきだとか、書いてある。(中略)どれも、現代でも通用する真実だ」(334) と感嘆の声を漏らしながら指摘するように、『農事詩』は農業をする上での実用書的な役割も担い得るからである。実際に、フィリスは、ジョン・マニングがカブ切り機の構造について説明するのに熱心に耳を傾ける(289) など、農業における具体的な知識、技術などについても懸命に学ぼうとしている。農作業の進み具合や、それに応じた父親の居場所についても、妻である母親よりも娘のフィリスの方がよく把握しているほどである(267)。これは知性を重んじるハウルマン牧師が、教養に欠ける妻には求めることのできない理解者としての資質を、知的な娘のフィリスに求めている証左である。すなわち、フィリスは父親と知性を介して親密な関係にあり、父親の完全な理解者でもある。また、母親からは亡くなった兄の分まで溺愛されている。

このような家庭環境にあっても、フィリスには彼女だけの避難所があり、ポールに「時々ね、家にいるのが息苦しく感じられることがあるの。

(中略)だから、子供の頃に、私はよく薪の山の下のところにならわっていたの」(323)と告白している。結論を急ぐなら、フィリスの言う息苦しさは、学びそして成長していきたいと願う彼女と、エゴイスティックな愛情を彼女に注ぐ親との意識のずれによる。彼女が息苦しさの理由を認識するのは、傷心した彼女の前でホウルマン牧師がそのエゴイズムをあからさまにするときだが、フィリスは言い知れぬ息苦しさにただ耐えているのではなく、避難所という自分だけの領域を持ち、そこで勉強したり仕事をしたりしながら(322)、独立心を持ちつづけている。説教を聴くのに着飾って来る女性たちをホウルマン牧師が非難する場面では、父が自分の嗜好を断定するのに圧迫感を覚え、フィリスは控えめながら異議を唱えさえしている。

‘[. . .] Phillis, I am thankful thou dost not care for the vanities of dress!’

Phillis reddened a little as she said, in a low humble voice,----

‘But I do, father, I’m afraid. I often wish I could wear pretty-coloured ribbons round my throat like the squire’s daughters.’ (284-85)

「虚飾による見栄」(“the vanities of dress”)は、明らかに女性のセクシュアリティを指している。この後に牧師は「虚飾を愛することは、墮落への誘いであり罠なのだ」(“The love of dress is a temptation and a snare”)とイヴの誘惑を連想させる表現を用いて、「虚飾による見栄」を重ねて否定しているし、そもそもヴィクトリア朝においては、「良き女性は人間というより天使のごとき生き物」(“nice women [. . .] as creatures more like angels than human beings”)⁸と見なされ、着飾って女性性を誇示するのは慎むべき態度と考えられていたのである。すなわち、当時の保守的な女性観から牧師は女性のセクシュアリティを否定し、娘が成長してセクシュアリティを表現する年齢になったことも否定している。理解者としての娘の知的な成長は認めても、肉体的な成長は否定する牧師のエゴイズムは、17歳になる娘に子供用のエプロン(pinafore)を着せたり、小さな子供にするように手をつないだり(272-73)という、ポールから見れば

奇妙な (“odd” [266]) 現象に表れている。もっとも、以上の異議を唱えた頃のフィリスは親の子ども扱いに甘んじている場合が多いのだが、その約2ヶ月後には、年齢に合った「きれいな麻のエプロン」や「黒い絹のエプロン」に着替え (287)、「女性としての自覚」 (“an acceptance of womanhood” [Sharps 439]) を表現するようになる。

ハンターは、「この時間のない世界の中で変化の可能性を感じさせるのはフィリスだけである」 (“It is Phillis who carries the sense of active possibility in this timeless world”)⁹ と指摘する。確かに、フィリスは縫い物をしたり、ジャガイモの皮を剥いたりして絶えず動きながらも、自分が変化し成長していることを無言のまま主張しつづけている。ただし、ホープ農場は単に平和的なユートピアではなく、ハウルマン牧師の思想的、技術的管理の行き届いた空間である。ギヤスケルは、農場を管理する上での牧師の姿勢については、その「現実的な良識」を強調することによって、必ずしも否定的に描いているわけではないが、娘の成長を認めずに束縛する父親としてのエゴイズムについては、当時の女性観やモラルへの複雑な思いを絡ませながら、批判的な態度を示している。

ポールがハウルズワスの気持ちをフィリスに伝えたと知って、ハウルマン牧師はポールを厳しく叱責するが、その中で牧師はフィリスのことを「うちの子」 (“the child”) や「小さくて幼気なうちの娘」 (“my poor little daughter”) と言及し、ポールが「穢れなき乙女心」 (“her peaceful maidenhood”) を台無しにしたと糾弾するのである (345)。しかし、この場面が描かれる以前に、フィリスが「庇護されるべき子ども」であるという牧師の論拠は既に無効にされていた。フィリスは、年齢相応の服に着替えたのに加えて、一時的なものだったが相思相愛の喜びをまるで小鳥がさえずるように表し (327)、「女性としての自覚」をはっきりと示していた。また、ベティーが、¹⁰「牧師さん夫婦はフィリスさんをもうずっと『うちの子』と呼んでいるんですよ、(中略) そうやって、今でも産着にくるまっているかのように思っているんです」 (“They’ve called her ‘the child’ so long [. . .] and they look on her still as if she were in her long clothes” [336]) とポールに指摘してもおり、誰の目から見ても牧師の子

供扱いは、不当で独り善がりなものである。しかも、フィリスがポールをかばいながら、ハウルズワスに恋い焦がれる苦しい胸の内を「恥辱」(“shame” [346]) という言葉で表すと、牧師はやり切れない気持ちを傷心した娘に向け、残酷さ (“his cruelty”) さえ発揮する。フィリスが「恥辱」という言葉を用いた背景には、「恋愛は愛情ではなく、欲望」(“love is not love, but lust”)¹¹ という当時の考え方がある。ゆえに、牧師も「恥辱」という言葉から娘の胸中を察して然るべきなのに、娘を思いやる心のゆとりさえ持てない。そして、フィリスに強いて、その想いを「お父さん、私はあの人のことが好きなの」(“I love him, father”) と告白させ、脳膜炎の発作へと追い込んでいくのである。

3 新しい価値との出会い、そして葛藤

ハウルマン一家が変化の乏しい旧世紀的な生活をしているのに対して、鉄道技師のハウルズワスは、「この仕事では、活動性と迅速性が肝心なんだ」(“Activity and readiness go a long way in our profession” [314]) という言葉が端的に表す通り、路線の拡大に伴って国内外を問わず各地を転々としながら、積極的に変化を受け入れている。それは、ハウルマン夫人からすれば、浮浪者 (“tramps” [307]) 同然の生活であって、彼の移り気な性格を暗示しているとも考えられる。しかし、グレイトヘッド技師からの手紙を読み終えるやいなや、カナダ行きを決心することについて言えば、名誉と財産を手に入れて、ハウルマン夫妻に娘の良き結婚相手として認めてもらうため (315) であって、彼なりの誠意と受け取るべきであろう。『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50) の同名の主人公が「私は名声を上げ、ひと財産築いた、家庭的な幸福に不足はない」(“I have advanced in fame and fortune, my domestic joy was perfect”)¹² と述べているように、名声と財産を家庭的な幸せを得るための条件と見なすのは、19世紀的な考え方としてはごく普通のことである。ジョン・マニングにも稼ぎのために愛する女性を置き去りにした経験がある (291)。しかし、ポールの「金や名誉など、フィリスには関係あり

ません」という指摘を待たずとも、聖書と古典の世界に規範を求めながら、田園で悠悠自適の生活をするフィリスやその両親が、物質的な幸福の追求をしないのは明白である。さらに、ハウズワスは、カナダに出発する直前にフィリスへの愛を誓いながらポールに語った中で、少なくともその時点においてフィリスの心情よりも仕事を優先させる理由として、グレイトヘッド技師がライバル会社と競争しながら路線工事を行っていることを挙げている (313-14)。この発言は、彼の「活動性と迅速性」が、資本主義的な競争原理によって動機づけられていることを浮き彫りにもしている。すなわち、彼の価値がハウルマン家の価値とは根本的に異なっていることを、ハウズワス自身が無意識のうちに暗示しているのである。

変化を厭わないハウズワスの姿勢が「学ぶことと愛することに矛盾を感じないフィリス」(“Phillis feels no contradiction between learning and love” [Uglow 545]) の知識欲や、古典を愛するロマンティックな志向を刺激するのもまた事実である。彼女がダンテに悪戦苦闘しているとき、ポールが何気なく言及したハウズワスに惹かれるのは、ハウズワスがただイタリア語に堪能だからではなく、イタリアで2年間鉄道工事に従事した経験があるからである (283)。外国への興味を喚起されたわけだが、このロマンティックな志向もまた、父であるハウルマン牧師から受け継いだものである。牧師は、ハウズワスのカナダからの便りに大いに関心を抱き、熟読の結果生じた質問を一覧表にしてポールに同封を頼むほどだが、それは文章が生き生きとして創意に富んでいるという理由からだけではなく、「陸に縛られた多くの人が海淵に神秘と魅惑を感じるように、牧師は海に憧れを持っていた」(326) ためである。また、ハウズワスの魅力について語るときに「ホラティウスやウェルギリウスが生きていた国にハウズワスが滞在していた頃の話を知っていると、古代の詩人たちが今でもそこに生きていそうな気がするんだ」(305) と言いながら、古典文学が生まれた異国へ思いを馳せている。このように農場の外に広がる世界に関心を持っているのだが、牧師はハウズワスの魅力を、理性を失わせる飲酒 (“dram-drinking” [305]) にたとえ、「彼の

話を聞いていると義務を忘れてしまう、夢中になってしまうんだよ」とポールに打ち明けながら、自らに自制を呼びかける。牧師の慎重な態度は、新しい知識や技術を取り入れても、理念の上では保守的なホープ農場の本質のゆえである。

フィリスも、ハウルズワスに惹かれながら、生来の内気さ (299) から警戒心を抱き、なかなか心を開くことができない。そして、自分がハウルズワスに魅了されるのを意識するたび、フィリスは執拗なまでに父の庇護を追い求めてしまう。心は新しい価値と田園の価値の間で揺らぎ、彼女は身をもってそれを表す。ハウルズワスの測量機器を、雨に濡れるのも厭わず取りに行く場面では、ハウルズワスの世慣れた冗談と、耳元でささやかれた言葉にひどく狼狽し、ポールの言を借りれば、ハウルズワスから遠ざかろうとするかのように (309)、父にぴったりと寄り添いながら帰宅する。自分を写生するハウルズワスの方に目を向けるやいなや、混乱を覚え、その場から去るときは、追いかけてきたポールに「5 エーカーの畑にいるお父さんのところに行ってくるわ」(311) と言い残して父のもとへと走る。この傾向は、フィリスが脳膜炎の発作を起こす場面でも最も痛烈に表現される。ハウルズワスがカナダに去ってなお、その魅力から逃れられないフィリスは、父親から「そしておまえは私たちを置き去りにして、家族を置き去りにして、おまえのお父さんとお母さんを置き去りにして、そして、この他人といっしょに世界中を放浪するつもりだったんだ」(346) と糾弾される。自分を束縛しようとする親のエゴイズムを痛感し、親が自分に期待するものと自分自身が望むものとの狭間でアイデンティティの混乱に陥ったフィリスは、顔を抱えて絶叫し、卒倒する。そのときでさえ、父に助けを求め、すがるように両手を父の脚に回しその足もとに倒れ込むのである (347)。

4 善意ゆえの苦しみ

ポールの父親ジョンは 19 世紀的なセルフ・メイド・マンの典型で、ポールは父が巻き上げ機の発明者として有名であることをハウルマン牧師

に自慢する。牧師は、19世紀的価値よりも不朽の価値を重視して、「誰がアルファベットを発明したかなんて、知られていないよ」(276)と軽口混じりに応じる。この対応について、ポールと同じく親を誇りに思う娘フィリスに責められた牧師は、憤慨したポールをなだめるように「善意は善意として受け取られるのではないかね？」(“kindly meant is kindly taken---is it not so?” [277])と試みさせる。この言葉は、悪意があってアルファベット云々と言ったわけではないという弁解と、照れ隠しとを意図したものであるが、実に示唆的な響きをもっている。

『従妹フィリス』では、善意は必ずしもよい結果ばかりを生み出すわけではなく、しばしばフィリスに苦い教訓をあたえている。その最たる例は、脳膜炎から回復したフィリスのために牧師が行った親心からの行為である。牧師はフィリスを子供ではなく年頃の娘として扱う決心をし、その決意を示すため、かつては「虚飾による見栄」と言って否定した青いリボンを差し出す(334)。しかし、娘に歩み寄る牧師の意志を示すこの行為は、皮肉にも、親子の意識のずれを消し去りがたいものとしてフィリスに認識させ、諦めにも似た境地へと追い込んでしまう。牧師はフィリスが生死の境をさ迷うのを見守りながら、娘が日々成長していることを痛切に思い知らされたばかりなのに、彼女が「地主のお嬢さんたちのように、首にきれいな色のリボンを巻いてみたい」(285)と述べたときから、脳膜炎が治癒するまでに経た著しい変化を全く認識できていない。その無理解を、青いリボンを渡すという行為が露呈しているのである。

フィリスは父親の善意に対して礼を言うものの、父親がいなくなると、リボンを脇にやり、諦めの気持ちから物憂げに目を閉じる。心の揺らぎを覚えるたびに、あんなにも父親の庇護を求めようとしていたフィリスが、辛い胸の内を全く親に見せなくなる。そして、父親に手渡されたリボンが象徴する女性的な生き方、すなわち、以前は彼女自身望んだであろう「家庭の天使」的な生き方を受け入れることもできずにいるところで、フィリスは、一部始終を見守っていたベティーに次の言葉を投げかけられる。

If I were you, I'd rise up and snuff the moon, sooner than break your father's and mother's hearts wi' watching and waiting till it pleases you to fight your own way back to cheerfulness. (354)

ここでベティーが遠回しに示したのは、気力が自然に戻るのを待つのではなく、奮闘して道を切り開く積極果敢な生き方である。それを受けてフィリスは、一時的にバーミンガムへ転地をした後は、自分が生きていくべき唯一の場所であるホープ農場で、かつてのように親子3人で暮らす努力をすることを決意し、「私たちは穏やかな昔に戻るわ。私にはわかるの。私にはできる、ええ、そうしてみせるわ！」(“we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!”)と宣言する。しかし、リボンを脇にやりながら無意識のうちに態度で示していたように、フィリスは、それまでのように父の影響や庇護を受けるのではなく、独りで自分のやるべきことを摸索する決意をしている。要するに、“will go back”と“shall”の複数形の主語とは対照的な、単数形の“can”と“will”の主語に、親との精神的な決別の意志を込めているのである。

ハウルマン牧師はフィリスを脳膜炎の発作に追い込み、このような境地に至らしめたが、その一方で、類まれな知識と学究心とで娘を導いてきた父親であり、「現実的な良識」で農場や教区、そして家庭を治める高い管理能力の持ち主でもある。このような父の長所にフィリスは明らかに尊敬の念を抱いているであろう。しかし父の管理意識は、たとえ善意から出たものとはいえ、強烈すぎるのである。牧師の管理意識が最も顕著に表れているのは、ミルクをこぼした子供たちへの対処を指示しながら言った「教区の規律と鞭は、私が握っておくことにしているんだ」(“I try to keep the parish rod as well as the parish bull” [274])という言葉においてである。もちろん、これは教区の親が自分で子供をむやみに罰しないようにという配慮から言ったもので、牧師の責任感が言わせた言葉であるが、罰をあたえる権限は牧師のみにあるとする態度には、疑問を感じずにはいられない。父親がフィリスに植え付けた学究心と学識は、彼

女が今後も生きていくための糧であるに違いないが、もともと彼女を、ヴィクトリア朝的な「家庭の天使」像から程遠いものにしてしまった。ポールは、居間に並ぶ古典文学やギリシャ語の文法書などにフィリスの署名を見出すなり怖気づき (275)、父親のジョンに「フィリスは女性というよりも男なんです。ラテン語やギリシャ語を理解しているんですから」(291) と言いながら、結婚はおろか恋愛の対象からもフィリスを除外してしまう。男性の目を惹く美貌と高い家事能力の持ち主でありながら、フィリスに家庭的な幸福が約束されているようには物語の始まりから見えなかった。実際に、フィリスは「家庭の天使」的な生き方を拒絶してしまうし、ギaskellが当初予定していた結末にも、妻としてのフィリスの姿は描かれていない。¹³ 牧師の強すぎる管理意識はまた、母親から娘への影響力を制限し、このこともフィリスが妻としての幸福を得られない一因を作っているように思われる。先に「虚飾による見栄」に関する父娘の齟齬を見たが、あの場面で母親は一応「フィリスがそう言うのは自然なことですよ」(285) と口添えしてやっている。しかし、父はそれをいとも簡単に否定し、母からの助け船を無効にしている。

善について、ハウルズワスも興味深いことを述べている。ポールは、旧態依然としたハウルマン一家がハウルズワスとは相容れないのではないかと心配して、「あなたは善意あふれる方だと思いますよ。でも、あなたの善意がハウルマン家の人たちの善意と同じ種類のものなのかどうか、僕にはわからないんです」(“I think you are good; but I don’t know if you are quite of their kind of goodness”) とハウルズワスに告げる。ハウルズワスは次のように答えている。

[. . .] you’ve found out already that there is greater chance of disagreement between two “kinds of goodness”, each having its own idea of right, than between a given goodness and a moderate degree of naughtiness [. . .]. (296)

ハウルズワスは神経質になっているポールの言葉尻を捕らえて、からか

っているだけなのかもしれない。しかし、仮にそうだとすると、その後の展開を考えれば、牧師の「善意」に関する発言と同様、この言葉も示唆的である。フィリスは、束縛や動揺を感じても、父親とハウルズワスの双方に本質的な善を見出しているからこそ、葛藤するからである。

ハウルズワスは、確かに、ハウルマン一家とは異なる価値観の持ち主で、結果的にフィリス以外の女性と結ばれた。世慣れた冗談でフィリスを狼狽させたり、眠り姫 (the sleeping beauty) にたとえるあたりに、利発で独立心の強いフィリスの本質を見逃していることを感じさせたりもする。しかし、『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859) のアーサー・ドニソーン (Arthur Donnithorne) が、結婚の意志もないのにヘティー・ソレル (Hetty Sorrel) と肉体関係を持ったのとは異なり、ハウルズワスは 19 世紀的な良識でハウルマン一家と接し、豊富な経験に基づく知識で一家を魅了した。そして、例えば、フィリスを写生している最中に、フィリスが当惑して走り去った後、いつになく静かで控えめな態度を取ることで、フィリスの心情を思いやる気持ちを表してもいる。

Holdsworth was very quiet during all the rest of that day; nor did he resume the portrait-taking by his own desire, only at my cousin Holman's request the next time that he came; and then he said he should not require any more formal sittings for only such a slight sketch as he felt himself making. (312)

しかし、悪気はなくとも彼がハウルマン家に混乱をもたらし、フィリスが脳膜炎で倒れる一因を作ったのもまた事実である。イタリア語を教えるときにフィリスに勧めた、マンゾーニ (Alessandro Manzoni, 1785-1873) の『いいなづけ』(The Betrothed, 1849-50) も、フィリスが旧世紀的な価値と新しい価値の間で葛藤する要因となる可能性をはらんでいる。ハウルズワスにしてみれば、これは彼女の語学力を考慮しての判断だったが (304)、政治的な変革期を舞台とするこの小説は、鉄道が象徴するのと同じ 19 世紀の流動的な世界観を扱うもので、ハウルマン牧師の旧世紀的な

価値観に合わないばかりか、小説という形式自体が非国教主義の精神に反している。¹⁴

ポールもまた、フィリスの苦しみに加担している。何らかの衝突が起こりうることを予感しながら、ハウルズワスをホープ農場にもたらししたのは他ならぬポールであるし、ハウルズワスの移り気な性格を考慮するだけの思慮が備わっていれば、ポールは彼の気持ちをフィリスに伝えることはせず、親子のすれ違いや脳膜炎の苦しみからフィリスを回避させることができたかもしれない。しかし、ポールがハウルズワスの名を言及し、フィリスの関心を惹いたのは、ダンテへの探究心を、ハウルズワスなら満たしてくれるであろうとの親切心からであったし、ハウルズワスの気持ちをフィリスに伝えたのは、心身ともに弱りきったフィリスを元気づけたい一心からであった。もしポールがハウルズワスの気持ちをフィリスに伝えなければ、クリスマスの礼拝堂で婦人たちが噂していた通り、フィリスは早死にしていたのかもしれない(320)。誰も悪意を持ってフィリスに接したわけではないが、誰もがフィリスの苦悩に関与している。そして、悪意がないことをわかっているために、フィリスは誰を恨むこともできず、独り苦悩に耐えねばならない。

5 結び

辛い経験をしたが、フィリスは人の善意を信じる気持ちを失ったわけではない。独自の道を摸索する決意をしたのは、ベティーの善意からの言葉を受け入れたことに拠るし、道を切り開くための最初の行動として、バーミンガムのポールの家にしばらく滞在することを希望するのは、ハウルズワスの思い出を辛くとも貴重に思っているためである。フィリスは、農場の外に広がる世界に憧れを抱き、その気持ちも一因となってハウルズワスに愛情を抱きながら、生来の保守的な性格から外に飛び出すことができなかった。しかし、ここに来て、19世紀的な変化を象徴する都市の1つであるバーミンガムで、保守的な性格からの脱却を図ると同時に、ハウルズワスを通じて知った変化に富む時代を、今度は自分の目

で見る勇気を奮い起こしている。

『コーンヒル・マガジン』側の都合により残念ながら実現しなかったが、ギヤスケルが当初予定していた結末からも、フィリスの前向きな姿勢を察することができる。そこでフィリスは、ハウルマン牧師の死後、病の母親を抱え、熱病で親を亡くした2人の孤児を養子に迎えて、ホープ農場を切り盛りしている。そして、ハウルズワスから学んだ実際的な知識を用い、労働者の力を借りながら地均しと排水の工事さえしているのである。ギヤスケルは書簡の中で、一連の出来事を通してフィリスが得た教訓を、『イン・メモリアム』(*In Memoriam*, 1950)の一節を引用して、「愛して失う方が、全く愛さないよりもいい」(“’Tis better to have loved and lost / Than never to have loved at all”)と表しているが、¹⁵ この言葉は、ハウルズワスとの恋愛を無駄にせず、道を開いたフィリスのたくましさとうまく言い表している。

この姿はまた、フィリスが結局のところ、父親の理念を受け継いでいることを示唆してもいる。労働者と共に働くフィリスは、ハウルマン牧師が規範としていた『農事詩』の「地均し、灌漑、排水の奨め」をまさに想起させるからである。確かにフィリスは、「私たちは穏やかな昔に戻るわ。私にはわかるの。私にはできる、ええ、そうしてみせるわ！」(“we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!”)の“can”と“will”単数形の主語に、親との精神的な決別の意志を込めたが、これは諦念による断絶ではなく、親子関係の発展的解消だった。彼女はいったん父の庇護や影響に背を向け、バーミンガムへ転地さえしたが、自分の取るべき道を摸索した結果として、父の理念を受け継ぐ決意をしたのである。もっとも、フィリスとハウルマン牧師の姿勢には違いもある。牧師は管理意識と責任感で家庭を治め、人を束ねようとしたが、フィリスは愛情を注ぐことによって、人と関わっていかうとしている。労働者たちと共に働くフィリスが、養子の1人を腕に抱き、もう1人は衣服の裾を引っ張るままにしているのに、その姿勢が感じられる。これは、父が娘に歩み寄りながら示した「家庭の天使」的な生き方を拒絶しながら、家庭の中で注がれるはずだった愛情を、社会的な弱者にも

広く注がれる愛情へと昇華させた結果と考えられるだろう。

註

1 それよりも15年ほどまえの1840年代中頃において既に、鉄道はイギリス各地で盛んに建設されていた。ディケンズは『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)の中で、この時期の鉄道の敷設とそれに伴う社会の変化を生々しく描き出している。また、ギヤスケルは『克蘭フォード』の最初の2章に、退役軍人で、鉄道会社で働いたこともあるブラウン大尉を登場させている。このブラウン大尉について、中村祥子氏は「*Cranford*----合理主義の影響を受けた‘因襲の町’」(『E・ギヤスケルの小説』[三修社, 1991] 56-82)で、老嬢たちに合理精神をもたらした人物として論じている。

2 ギヤスケルの『従妹フィリス』執筆のきっかけについては、ジェラン(Gerin 234)、シャープス(Sharps 430)、そして、キーティング(Peter Keating, Notes, *Cranford and Cousin Phillis* [Harmondsworth: Penguin, 1986] 356)を参照。

3 ユーグロウ(Uglow 541)、イーソン(Easson, introduction, *Cousin Phillis and Other Tales* viii)を参照。

4 アロット(Allott 31)と、ストーン(Donald D. Stone, *The Romantic Impulse in Victorian Fiction* [London: Harvard UP, 1980] 166)を参照。

5 その他の解釈として、アロット(Allot 32)とホプキンス(Hopkins 273)はフィリスの将来の明るい見通しを指摘し、キーティング(Keating 29)は過渡期にある田園とフィリスを重ね合わせ、田園の将来が未知数であることから、フィリスの将来も見通しのきかないものとしている。この言葉は、また、語り手のポール・マニングが独り住まいを始めたばかりの興奮覚めやらぬ心境を開口一番に述べる“*It is a great thing for a lad when he is first turned into the independence of lodgings*” (259)と完全な対照をなし、自立が当然のことと見なされる少年の場合に比べて、少女の自立がいかに困難なものであるかを浮き彫りにしているとも考えられるだろう。

6 ホウルマン牧師の宗教観については、シャープス(Sharps 432)とダシー(Duthie 174-76)を参照。

7 引用された詩について、イーソンは“*the passage in the first Georgic of weather signs at sunset*” (Easson, explanatory notes, *Cousin Phillis and Other Tales* 363)と指摘している。

8 Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind* (New Haven: Yale UP, 1957) 354-55.

9 Shelagh Hunter, *Victorian Idyllic Fiction: Pastoral Strategies* (London: Macmillan, 1984) 102.

10 ベティーについて , ジェラン (Gérin 238) は “[Betty] sees most clearly what ails Phillis and [. . .] helps her in the end to survive” と指摘している。

11 Houghton 341.

12 Charles Dickens, *David Copperfield* (Harmondsworth: Penguin, 1985) 939 を参照。

13 ギヤスケルはジョージ・スミス (George Smith) 宛の書簡の中で次のように述べている。The Minister dead, I married---we hear of the typhus fever in the village where Phillis lives, & I go to persuade her & her bedridden mother to come to us. I find her making practical use of the knowledge she had learned from Holdsworth and, with the help of common labourers, levelling & draining the undrained village---a child (orphaned by the fever) in her arms another plucking at her gown---we hear afterwards that she has adopted these to be her own. (*Further Letters* 259-60)

14 イーソン (Easson, introduction, *Cousin Phillis and Other Tales* xiii) , 平岡裕弘訳 『いいなづけ---17 世紀ミラーノの物語---』 (河出書房 , 1989 年) を参照。なお , この小説の原題は , *I Promessi Sposi* である。

15 註の 13 でも引用した *Further Letters* 259-60 と Lord Alfred Tennyson, *In Memoriam*, xxvii, st. 4 を参照。

(矢次 綾)